

それぞれの教材について、次の空欄に本文中の言葉を入れ、全体の構成を確認しよう。

### 「最初のペンギン」 茂木健一郎

第1段落…「有限の立場」と創造性(初め〜15・12)

人間はいわば「<sup>①</sup>」 「<sup>①</sup>の立場」に投げ込まれているのであり、未来も「<sup>②</sup>

「<sup>③</sup>」で不確実なものである。しかし、その状況は、全ての生物が投げ込まれている条件でもあり、そこには「<sup>③</sup>」 「性が潜んでいる。」

第2段落…「最初のペンギン」が示す「決断」(15・13〜17・4)

水の中になかなか飛び込まないペンギンのふるまいの背後には、「<sup>④</sup>」 「<sup>④</sup>への厳しい条件がある。」

ペンギンは海の中で餌を捕らなければ飢え死にしまうが、そこには敵もいる。その不確実性の下で

「<sup>⑤</sup>」 「<sup>⑤</sup>を下し、海に飛び込む」 「<sup>⑥</sup>」 「<sup>⑥</sup>のペンギン」がいるからこそ、群れ全体にとつての事態が開かれる。

第3段落…直観を支える感情の技術(17・5〜終わり)

未来が見渡せないままに不確実性の海に飛び込むというのは、「<sup>⑦</sup>」 「<sup>⑦</sup>の発揮において、人間が行

っていることである。不確実な状況下で「決断」を下す時の人間の「<sup>⑧</sup>」 「<sup>⑧</sup>を支えるのが感情である。うまく生き延びるためには、不確実性に立ち向かい、乗り越えるための」 「<sup>⑨</sup>」 「<sup>⑨</sup>の技術を磨く必要がある。」

### 「恐怖とは何か」 岸田秀

第1段落…恐怖とは何か(初め〜53・7)

人間は「<sup>①</sup>」 「<sup>①</sup>に関わり、そこに組み込めないもの、その安定を乱すもの、崩壊させるものを恐れる。人間が」 「<sup>②</sup>」 「<sup>②</sup>を恐れるのは、それが」 「<sup>①</sup>の消滅を意味するからである。」 「<sup>②</sup>を」 「<sup>①</sup>から排除せずに組み込んでしまえば、恐怖は軽減される。」

第2段落…害のないことでも恐ろしい(53・8〜54・12)

人間はなんの害もないことでも「<sup>③</sup>」 「<sup>③</sup>と思うことがある。自分が存在している世界の」 「<sup>④</sup>」 「<sup>④</sup>が崩れると、」 「<sup>①</sup>の安定も崩れるからだ。神や」 「<sup>⑤</sup>」 「<sup>⑤</sup>は、世界の成り立ちを説明し、不安と恐怖から逃れるためにつくられた。」

第3段落…怖がり屋とはどういう人か(54・13〜55・10)

恐怖心の強い人は「<sup>①</sup>」 「<sup>①</sup>を狭く固め、そこから多くのものを排除し、」 「<sup>⑥</sup>」 「<sup>⑥</sup>している人である。」 その排除され、「<sup>⑥</sup>」 「<sup>⑥</sup>されたものが絶えず意識に出てこようとし、あるいは外界に」 「<sup>⑦</sup>」 「<sup>⑦</sup>されてその人を脅かす。」

第4段落…怖いもの見たさ(55・1〜終わり)

狭く固めれば自我は安定するが、「<sup>⑧</sup>」 「<sup>⑧</sup>なものになる。そこから逃れるには時には」 「<sup>③</sup>」 「<sup>③</sup>目に遭う必要がある。我々の人生は退屈か恐怖かの二者択一に常に直面している。」